

半促成なすの着色不良果防止対策について

1 試験のねらい

本県の半促成なすの栽培面積は、現在除々にはあるが増加傾向にあり、本作型での問題点として、収穫後期における過繁茂と着色不良果の多発生があげられている。そこで、その防止対策として、昼温管理と栽培管理の整枝及び摘葉処理について検討した。

2 試験方法

品種は千両2号を供試し、昼温は、25、30、35℃の3段階、栽培管理は、放任、整枝（側枝3節摘心）、弱摘葉（整枝＋4葉に1葉摘除）、強摘葉（整枝＋2葉に1葉摘除）の4処理とし、これを組合せて12処理とした。なお、摘葉処理は開花直上葉を開花～着果期に行った。は種は12月8日、定植は3月12日に畝幅180cm、株間55cmの2条植えとし、仕立ては3本仕立てとした。規模は1区10株、1区制で、施肥量はN、K₂O3.6、P₂O₅4.3kg/a施用した。

3 試験結果及び考察

生育状況をみると、35℃地区では定植後数日間、日中しおれ気味に経過したが、活着早く、その後も生育旺盛で、葉の大形化など過繁茂気味に経過した。25、30℃区では活着が遅れ、活着まで区間の差はほとんどみられなかったが、30℃区では活着後生育順調に経過し、草勢も適度と思われたのに対し、25℃区では活着後も生育緩慢で最も生育が劣った。

開花始期・収穫始期とも、生育の進んだ高温区ほど早くなり、初期収量も同様の傾向がみられたが、35℃区では一時落花が多くなったため、6月に収穫の谷間があり、総収量では30℃区が最も多収となった。25℃区は特に初期収量が劣り、後期収量はやや多くなったが、最も低収であった。栽培処理間の比較では、放任区に比べて、整枝区及び弱摘葉区では5%強の減収となり、強摘葉区ではさらに5%程度減収した。

着色不良果の発生は、高温区ほど早く認められ、35℃区では5月上旬からみられた。また、発生程度同傾向であった。栽培管理による着色不良果の防止効果については、35℃区では強摘葉により若干認められるが不十分であり、30℃区では整枝及び摘葉の組合せにより、顕著に認められた。25℃区では生育が不良であったため、着色不良果の発生が全般に少なかったが、効果は若干認められた。

4 成果の要約

半促成なすの収穫後期の過繁茂及び着色不良果発生の防止対策について検討した結果、良品質のものを多収穫するためには、昼温管理については、活着促進のため、初期は35℃位のやや高目にし、生育初期以後は30℃を目標に換気をする。

（担当者 野菜部 和田悦郎）

表-1 生育及び収量

No.	昼温 ℃	処 理	4月16日調			開花始 期月日	収穫始 期月日	総収量 kg/a	着色不良 果指数	上物率 %
			草丈cm	茎径mm	葉長cm					
1	35	放 任	43.3	10.3	26.6	3.23	4.10	608	59.1	71.1
2		整 枝	40.6	10.0	26.0	22	10	562	54.1	78.8
3		弱摘葉	42.4	10.5	26.4	—	12	592	47.7	78.1
4		強摘葉	41.0	10.2	25.6	—	12	529	41.5	78.1
5	30	放 任	33.3	8.8	21.4	3.30	20	642	53.0	80.2
6		整 枝	29.4	8.2	20.3	27	20	587	26.8	84.7
7		弱摘葉	33.3	8.6	21.1	—	18	615	29.0	86.7
8		強摘葉	32.6	8.8	22.8	—	18	559	23.1	84.4
9	25	放 任	24.7	7.8	20.0	4.4	27	479	31.6	84.9
10		整 枝	27.5	7.9	20.0	3.26	23	472	27.7	83.8
11		弱摘葉	28.0	7.8	18.9	—	23	448	20.0	87.9
12		強摘葉	26.3	8.1	20.0	—	23	456	19.5	79.8

※ 着色不良果指数

$$= \frac{3 \times A + 2 \times B + C}{3 \times (A + B + C + D)} \times 100$$

着色不良部分が全体の

A : 30%以上 C : 10%以下
B : 10~30% D : 正常果

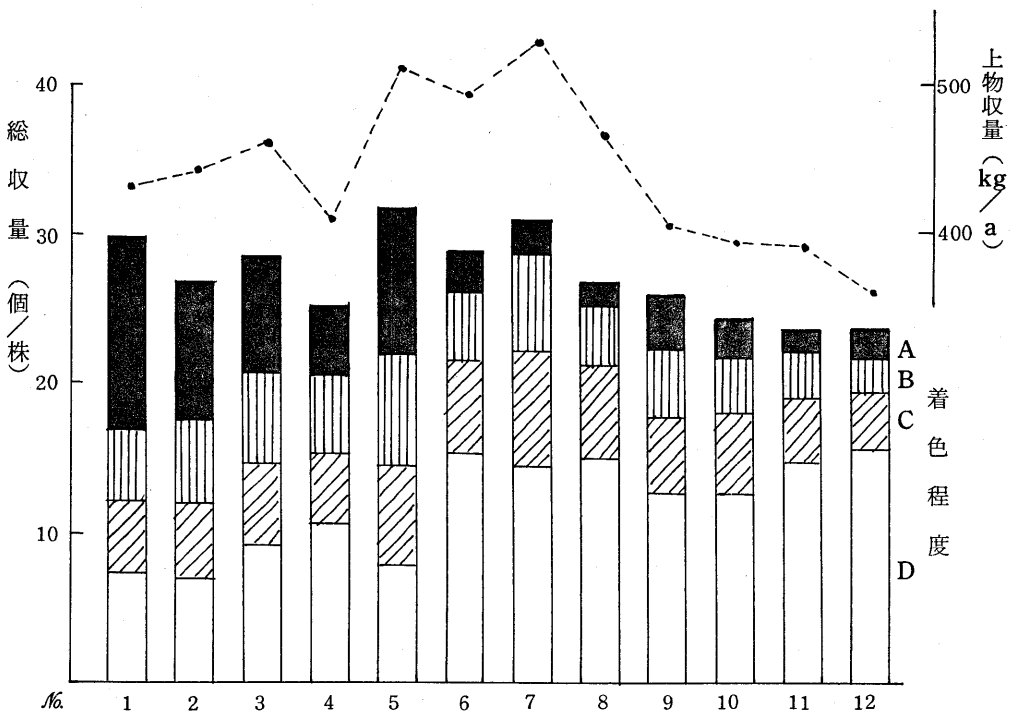


図-1 総収量及びa換算上物収量